

# 「和泉式部日記」考

## 作者について

国文四年五十番 山下直子

はじめに

「和泉式部日記」は、長保五年四月に和泉式部と帥宮敦道親王との交渉がはじまってから、同年十二月十八日に和泉式部が帥宮によって官邸に召し入れられ、さらにそのため帥宮の北の方が官邸を去るという事態が起きるまでの和泉式部と帥宮の恋愛の経過を記したものである。

この日記は他の同時代の日記文学と異なって、主人公を「女」と三人称化し、また「女」の眼のとどく範囲を越えたところまで経験性、実存性をもって書かれているので、古くから写本の題号には「日記」と「物語」の双方が用いられている。このためにこの作品は主人公和泉式部の日記ではないのではないかとという疑問が提出され日記か自記ではないか今までにいろいろと論じられてきた。

卒論では、「和泉式部日記」の作者が和泉式部自身であるか否かという問題について、まず第一章で諸説の概要を述べそれを踏まえた上で第二章、第三章で問題点の考察をしたが、本稿では、紙幅の関係で第二章第二節式部の心中

描写、第三章終焉部について中心に叔べてみたい。

### 第二章 問題点考察

#### 第一節 物語的な叙述

先にも述べたように、作者が和泉式部ではないとする説の最も大きな論拠は

##### (1) 主人公の第三人称化

の二点である。しかし、これらを詳しく見ていくと、まず(1)については、文のはじめでは主人公を三人称で「女」と

表現していてもいつのまにか一人称的な書き方になる場合が多く、従って「女」は一人称の代弁的なもので容易に

「私」に置き換えることができるものである。次に、(2)の場面はこの作品中三十八箇所見られ、(a)主人公「女」の視界を越えた場面の描写十六例、(b)帥宮の心中描写二十七例(うち七例は(a)の中に含まれる)、(c)北の方の心中描写二

例、の三種類に分けることができるが、④については、一見式部の眼のとどく範囲を越えているようだが、実は式部が想像して描写できる範囲にとどまっていると思われる。

⑥については、帥宮の式部観や式部の和歌に対する帥宮の感想、感嘆を一、二行で表わしたものがほとんどで帥宮の内面を語るほどのものはない。そしてその中には、式部自身の希望や美化や理想化がはたらいているように思われる。また⑥についても、同じ女でしかも式部の恋愛の相手である帥宮の北の方の心中であるから、式部にとっては帥宮の心中よりも容易に察することができると思う。

以上を総合すると、主人公の第三人称化も主人公の眼のとどく範囲を越えた描写も、作者 主人公和泉式部を否定してしまふほどのものではないと思われる。

## 第二節 式部の心中描写

織田裕子氏は、この作品には和泉式部の心中描写が非常に多く、その内容も単純で類型的な帥宮の心中描写と比べると複雑で簡単に分類できないと指摘された。第二節では、この和泉式部の心中描写について見ていきたい。

主人公和泉式部の心中描写の場面は、この作品中八十例あると思われる。これは帥宮の心中描写に比べてはるかに多い。また、一つの長さも、帥宮の場合は一番長いものが、侍従の乳母の諫言につづく部分（P29）で四行、あとはほとんど一、二行程度のものであるが、式部の心中描写は五行以上のもものが四例みられ、一番長いものは十行にわたっている。

○いと久しうなにかよと…身も心うくて「なぞもかく」と歎くほどに御文あり

○げに今さら…この濡れ衣はさりともし着やみなんと思ひて

○かばかりねんごろに…身くても御覧じてんと思ひて

○胸うちつぶれて…又いかなる事聞しめしたるにかと

に恥づかしうて

心中描写の表し方も、帥宮の場合は二十七例ともすべて

下に「…おぼさる。」「…おぼすに」「…おぼす。」「…おぼして」「…おぼせど」などのように、「思ふ」の尊敬

語「おぼす」（「おぼしめす」、「おぼしつむ」、「おぼし出づ」、「おぼし乱る」なども含む）を伴っているが、

式部の場合は

①。ことばにて聞えさせんもかたはらいたくて、なにかは、

あだ／＼しくもまだ聞え給はぬをはかなきことをも、

と思ひて

○すぎごとする人々はあまたあれど、ただ今はともかく

も思はぬを世の人はさま／＼にいふめれど、「身のあ

ればこそ」と思ひて過ぐす。

○…とあれば折を過ぐし給はぬをかしと思ふ。あはれ

なる折しもと思ひて

などのように下に「思ふ」を伴うもの

②。女、ながめ出だしてゐるに、もて来たれば、あへな

き心地して

55

P25 P25 P12 P80 思ふ10行 P63 9行 P40 5行

○よろづにもののみわりなくおぼえて御いらへすべき心地もせねば

○ありしよりは時々おはしましなどすれば、こよなくつれづれも慰む心地す。

などのように「心地す」を伴うもの

③○宮の御さまいとめでたし。御直衣にえならぬ御衣、出だし桂にし給へるあらまほしう見ゆ。目さへあだじくしきにやとまでおぼゆ。

○胸うちつぶれて、あさましうおぼゆ。

○心のどかに御物語起き臥し聞えて、つれづれもまぎるれば参りなまほしきに御物忌過ぎぬれば例の所に帰りて、今日はつねよりもなごり恋しう思ひ出でられてわりなくおぼゆれば聞ゆ。

○これにつけても我が身恥づかしうおぼゆ。

○このように「おぼゆ」を伴うもの

④○この袖の事ははかなきことなれどおぼし忘れでのたまふをかし。

○げに、かれよりまづのたまひけるなめり、と見るもをかし。

○この童の「いみじうさいなみつる」といふをかかしうて

○例のつれづれなくさめて過ぐすぞ、いとはかなきやなどのように形容詞を伴ったもの。  
などが見られ、形の上でも多様である。

P97

P67

P66

P65

P101 P85

P80 P72

P73

P59

八十例中、思っている主体を「女」と明示しているのは十例だけで、あとは主語は省略されている。「宮」の場合には、「おぼす」に敬意がこめられているので、主語を明示しなくても作者は常に宮の心中を第三者の立場から書いていることが明らかだが、「女」の場合は、主語が省略されると心中描写が作者の自記のような感じをうけることが多い。これは③④の場合特に顕著である。

③の「おぼゆ」は、「思ふ」に上代の助動詞「ゆ」が付いたものであるが、ここでは「ゆ」は自発の意である。

「おぼゆ」を伴う心中描写は、「思ふ」を伴う場合よりも容易に作者と主人公和泉式部が重なるように思われる。宮崎莊平氏は、「我が身恥づかしうおぼゆ。」について「完全な一人称叙述が現れ」と述べておられる<sup>(注2)</sup>。つまり、今まで作者は主人公を「女」と表現して形の上では第三者の立場をとってきたものの、ここに至ってついにぼろを出し「我が身」と主人公の心中を一人称で表してしまったのである。

また、④の場合、これが帥宮の心中描写なら、たとえば「…おぼし忘れでのたまふもをかしとおぼす。」という形になるところであるが、こゝは「をかし」で終止している。織田裕子氏は、こゝを式部の心中描写の中に入れておられないが「書き手の主観・評価・判断を表現する」個所とし、それが「式部の評価判断そのものと考えざるを得ない個所」とされた<sup>(注3)</sup>。つまり、たとえば

○この袖の事ははかなきことなれどおぼし忘れでのたま

ふもをかし

の場合「『をかし』と判断を下したのは書き手であると同時に『手枕の袖』の歌を贈答し合っている式部その人の批評でもなければならぬ。」というのである。私はここを式部の心中描写に含めているが、結局内容的には織田氏と同じことと思う。式部の心中描写でありながら、作者は自分の主観を表すような書き方をしているのである。このように微妙なちがいで二つのとり方ができるのは、とりもなおさず、ここで作者と主人公が重なっているからである。

また、主語を「女」と明示している場合でも、第一節で述べたように、文のはじめでは第三人称「女」を用いているものの、いつのまにか「女」の自記的な叙述になっている。

以上のように、式部の心中描写は、形の上でも帥宮の心中描写とは異なり、その多くが式部の自記ともとれるような書き方がなされているのである。

次に式部の心中描写の内容を見ていくと、帥宮の心中描写の多くが帥宮の式部観、あるいは式部の歌に対する感想や感嘆で割と単純なものであったように、式部の帥宮観、あるいは宮の歌に対する感想を一、二行程度に書き表しただけの簡単なものもかなり見られる。しかし、中には九行十行にわたるものもあり、そこには式部の心中思惟がえんえんと述べられている。たとえば

○げに今さらさやうに慣らひなき有様はいかがせん、なご思ひて、一の宮のことも聞えきりてあるを、さりと

て、「山のあなたに」しるべする人もなきを、かくて過ぐすも明けぬ夜の心地のみすれば、はかなきたはぶれごともしふ人あまたありしかば、あやしきさまにぞいふべかめる、さりとて、ことさまの頼もしき方もなし、なにかは、さてもこころみんかし、北の方はおはすれど、ただ御方々にてのみこそ、よろづのことはただ乳母のみこそすなれ、顕証にて出でひろめかばこそはあらめ、さるべき隠れなどにはあらんにはなでふことかあらん、この濡れ衣はさりともし着やみなん、と思ひて<sup>P62</sup>かばかりねんごろにかたじけなき御ころざしを見ず知らず、心こはきさまにもてなすべき、異事はさしもあらず、など思へば、参りなんと思ひ立つ。まめやかなることどもいふ人々もあれど耳にも立たず。心うき身なれば、宿世にまかせてあらん、と思ふにも、この宮仕へ本意にもあらず、殿の中こそ住まほしけれ、又うきこともあらばいかゞせん、いと心ならぬさまにこそ思ひいはめ、猶かくてや過ぎなまし、近くて親はらからの御有様も見聞え、又むかしのやうにも見ゆる人の上をも見さだめん、と思ひ立ちにたれば、あいなし。参らんほどまでだに便なき事いかで聞しめされじ、近くてはさりともし御覧じてん、と思ひて<sup>P79</sup>

これらは、帥宮から宮邸入りを勧められた式部が決心しかねて様々に思い悩む場面である。式部は、結局は帥宮の勧めに従って宮邸にあがることになるが、それは簡単に決められたことではなく、決心するまでに式部がかなり複雑

に思い悩んだことがここから読みとれるのである。

そして、こういう心中思惟の中に「一の宮」「親はらから」「むかしのやうにも見ゆる人」などが何の説明もなく突然に登場する。作者は自明の人物として扱っているようだが、これらの人物が誰をさすのか、日記本文からだけでは具体的にはわからない。鈴木一雄氏は、「心中思惟は當事者だけの問題であるから、その自然さを保つたかぎり、内容は不明瞭になりやすい」と言っておられる<sup>(注4)</sup>。従って、この作品の場合、作者を心中思惟の當事者とすれば、「一の宮」や「親はらから」に具体的な説明がないのも当然のこととすることが出来る。また、「一の宮のことも聞えきりであるを」とあるからには、恐らく「一の宮」出仕の話があつて、それがそのまま保留になっていることが推測できるが、和泉式部のそのような事情を知っているのは極狭い範囲の人に限られると思う。作者は、式部の心中思惟にこのような事情が書けるほど式部のことをよく知っている人でなければならぬと思われる。

そもそも、この作品は主人公の心中描写ではじまっている。

○夢よりもはかなき世の中を歎きわびつゝ、明かし暮らすほどに、四月十余日にもなりぬれば、木の下くらがりもてゆく。築土の上の草青やかなるも、人はことに目もとゞめぬを、あはれとながむるほどに、近き透垣のもとに人のけはひすれば、誰ならんと思ふほどに、故宮に候ひし小舎人童なりけり。あはれにもののおぼゆる

ほどに来たれば：

景情一致の起筆である。これは、作者がそのまま「歎きわびつゝ明かし暮らす」人であるといった書き方でもあり、明らかに作者と主人公が重なっている。この自記的な書き方は、このあと訪れた小舎人童との会話を経て、場面が宮邸に移る前までつづき、そのころまでには、地の文や会話の中で用いられる「故宮」「帥宮」ということばから、この作者＝主人公が和泉式部であらうことまで自然に印象づけられている。鈴木一雄氏は、こうした起筆は日記作品にふさわしいものと指摘され、この作品が「おのれ」の心境とその心境をうつつにふさわしい情景をみごとに融合した描写をもつて書きおこされている以上、『蜻蛉日記』

『更級日記』などと同じ日記文学に属するわけで、明らかにつくり物語とは一線を画しており、この『日記』の物語性<sup>(注5)</sup>の特色として論じられる第三人称的叙述や超越的視点の問題より以前に考えねばならないところである。』と述べておられる<sup>(注6)</sup>。この作品の起筆が主人公の自記を思わせることは注目に値すると思う。

以上のように、この作品中には式部の心中描写がかなり多く見られ、そのほとんどが式部の自記ともとれる書き方がなされている。その内容も、宮の心中描写のように単純で類型的なものばかりでなく、人には知られないような式部の内面を詳細に語るものも見られる。また、この作品の起筆には作者がそのまま主人公であることを暗示した情景一致の文がみられる。これらの点を総合すると、式部の心

中描写は、式部自身の自記を思わせるものと言えらると思ふ。式部の心中描写に注目すれば、この作品の作者は自然と主人公和泉式部自身と思われるのである。

### 第三章 終焉部について

この作品の終焉部には、帥宮の北の方の里帰りの事情が述べられているが、これは「栄花物語」の記事とかなり異っている。即ち、この作品には

○北の方の御姉、春宮の女御にて候ひ給ふ里にもし給ふほどにて御文あり。「いかにぞ。このごろ人のいふことはまことか。我さへ人げなくなんおぼゆる。夜の間にわたらせ給へかし」とあるを、かからぬことだに人はいふ、とおぼすに、いと心うくて御返、「うけ給はりぬ。いつも思ふさまにも……」

とあって、北の方のもとに姉の宣耀殿女御から手紙が来て里帰りを勧められたように述べられているが、「栄花物語」<sup>P102</sup>巻八・初花には、

○小一条の中の君と聞ゆるは、宣耀殿の御おとうとの君、殿も上も、ともかうもなきでうせ給ひにしかば、いかで女御殿に劣らぬ様の事をなどおぼし構へて東宮の御おとうとの帥宮に聞えつけ給へりしかば、南院に迎え給へりしかど年月に添へて御心ざし浅うなりもて行きて、和泉守道貞が妻をおぼしさわきて、この君をば事のほかにおぼしたりしかば居煩ひて、小一条のおば北の方の御許に帰り給ひにしぞかし。されば東宮

も、宣耀殿も、この事を「我口入れたらましかばいかに聞きにくからまし。知らぬ事なれば心安し」とぞおぼし宣はせける。御幸同じ御はらからと見え給はず。和泉をば、故弾正宮もいみじきものに思ほしたりしかば、かく帥宮もうけとりおぼすなりけり。故関白殿の三の君帥宮の上も、一条わたりに心得ぬ御様にてぞおはする。又小一条の中の君も如何とぞ人おし量りきこゆめる。

という記事があり、宣耀殿女御は、自分の妹が里に帰ってしまったことについて、「自分が口を出して媒などしたのだったらどんなに聞きづらい事であろうか。あずかり知らないことだから気楽だ。」と言っているのである。<sup>(注7)</sup>

「栄花物語」は、「和泉式部日記」が扱っている長保五年(一〇〇三)よりもずっとあとに書かれている(長元二年(一〇二九)頃と推測される<sup>(注8)</sup>)し、どちらが正しいとも、どちらの態度が宣耀殿らしいとも断言はできないが、恐らく世間一般には「栄花物語」の記事のように思われていたのではないかと思う。

それでは、なぜこの作品ではこのように描かれているのか。

この場面のつづきに、北の方の動向を見守る式部の姿が次のように描かれている。

○：宣旨、「かうくしてわたらせ給ふなり。春宮の聞しめさん事も侍り。

おはしましてどごめ聞えさせ給へ」と聞えさわぐを見

るにもいとほしう苦しけれど、とかくいふべきならねば、たゞ聞きおたり。聞きにくきころ、しばしまかり出でなばや、と思へど、それもうたてあるべければ、たゞに候ふも、なほもの思ひ絶ゆまじき身かなと思ふ。 P104

鈴木一雄氏は、「ここに記されている女は、あまりにもつましく、また傍観者にすぎるとも言える」とされ、「女の側に、はたしてただ一回も北の方に挑戦するような言動がなかったか、宮から離れることを拒否して周囲に挑発するような態度はなかったか、年上の女らしく宮の態度をたくみに操縦し、宮の庇護を楯にする心理的な策動はなかったか、等々の疑問も生まれる。」と述べられた。鈴木氏の言われるとおり、北の方の動向を見守る式部は、謙虚でつましやかに描かれている。しかし、この作品には描かれていないにしても、事実として、北の方に対する挑戦的な態度が全くなかったとは言い切れないと思う。作者は、ここでも式部を美化しているような感じがする。

本文で「夜の間にもわたらせ給へかし」<sup>P103</sup>という宣耀殿の勧めに対して北の方は「迎へに給はせよ。これよりは：」<sup>P103</sup>と迎えを依頼している。そして「御兄人の君だち」に迎えに来てもらって里に帰ることになるが、この間の情況を式部は見ているだけでどうすることもできないでいる。この作品の終焉部からは、北の方の里帰りの事情が、このように読みとれる。

大倉比呂志氏は、この終焉部を「北の方を中心とした△小物語▽」とされ、「この△小物語▽は、決して自分が北の

方を追い出したのではないことを強調して自己弁護を計るための手段であった」「そうすることによって式部は自己保全を確立すると同時に、北の方の体面をも保ち得るよう△小物語▽を創作したのではなからうか。」と述べておられる。<sup>△注10▽</sup>果してここに「北の方の体面を保つ」という気持ちがあればたいていたかという点については疑問が残るが、大倉氏の言われるように、この終焉部の創作が式部の立場を弁護するための手段であると考えるならば、ここにも、この作品の作者は和泉式部の線が暗示されていると思う。第三者が、世間一般に言われている帥宮の北の方の里帰りの事情を、式部の立場を弁護して、このように書きかえたとは考え難いと思うのである。

#### 結び

「和泉式部日記」の作者について、主人公和泉式部の心中描写とこの作品の終焉部を中心に考察してきた。

「和泉式部日記」は、確かに主人公和泉式部を第三人称化し、和泉式部の眼のとどく範囲を越えた描写がなされているなど一見物語的であるが、和泉式部の心中描写や終焉部の「栄花物語」の記事との相違を考えあわせると、やはり作者は和泉式部自身と考えるのが穏当と思われる。

#### △注▽

1. 「和泉式部日記の作者について」国語国文

昭和三十三年四月号

2. 「和泉式部日記作者論の可能性」  
泉式部 昭和五三年七月 P131  
国文学紫式部と和
3. 八注1Vに同じ
4. 「全講和泉式部日記」本文解釈 P274
5. 鈴木一雄氏は主人公和泉式部の眼のとどく範囲を越えた描写を「超越的視点」とよんでおられる。
6. 「全講和泉式部日記」考説 P370
7. 本文引用及び口語訳は「栄花物語・全注釈一」角川書店による。
- 8.
9. 「全講和泉式部日記」本文解釈 P360
10. 「和泉式部日記 卷末注記に関する一覚書」 P156  
平安文学研究 第四八輯